

## 要求を束ねる運動の中に 変革の力を確信して

全障研全国副委員長 中村尚子

肩にかけた大きな鞆はまるで「動く資料室」のよう。次つぎと障害児教育に関する国内外の資料を出して解説をしてくれる。教職員組合運動のリーダーとしての三島敏男さんの、そんな姿を覚えている人は多いだろう。同時に三島さんは、歩いて集めた資料と事実に基づいて論文を書き、学会で発表することを怠らない希有な存在の教師だった。休むことを知らないかのような生き方をした三島さんのエネルギーの源を知りたくて、その歩みをたどってみた。

＊

教職員組合の専従として定年を迎えた40年ほどの教員生活で、勤務校は東京都立江東ろう学校1校である。ここに三島さんの原点がある。

1961年、東京では障害があるために就学できない子どもの保育や教育を求めて、「未就学児童を守る会」が結成される。会は、すでに義務教育であった盲学校とろう学校を中心に、重複障害児学級設置を求めて運動を広げていった。江東ろう学校の地域では、入学を拒否された子どもを集めて昼間は母親らが保育し、夕方から仕事を終えた教員が「教育する」という、私設の教室が運営されていた(64年)。とりくみによって

子どもは目に見えて変わっていく。

ここでの実践と運動は、やがて江東ろう学校に知的障害を併せもつ子どものための学級を開級させた。正規の学級ではないが、校内の教員配置をやりくりして誕生した重複障害児学級である。三島さんはこのとりくみのなかで、要求の正当性とそれにもとづいてすすめる運動の力に確信をもち、みずからも重複障害児学級を担任する。

教育権保障運動と子どもと向き合う実践のなかで、三島さんは「子どもの実態に合わない教育課程を押しつけていないか」と問いはじめた(教育研究会集レポート「教育課程の基本的問題について」66年)。

全障研結成が呼びかけられた1966年。すでに教職員組合の役員だった三島さんは、結成の準備活動に携わりながら、障害者の権利侵害の根源を明らかにすることと、発達の理論を学び上げることに邁進した。

1968年からの日本教育学会課題研究「権利としての障害児教育」は、全国に広がりつつあった就学保障運動を理論的に支えるものであったが、三島さんは一員としてたくさんの報告を行い、そのまとめである『障害児の教育権保障』(明治図書、



### 三島敏男さん

みしま としお / 1934～2012年。東京学芸大学ろう教育学科卒業後、東京都立江東ろう学校の教員となる。1962年東京特殊学校教職員組合(現、東京都障害児学校教職員組合)執行委員、63年日本教職員組合特殊学校部常任委員、77年～同障害児学校部長、91～94年全日本教職員組合障害児教育部長を歴任し、一貫して教職員組合運動を牽引した。全障研の結成準備に関わり、1967～76年全国事務局員。

1975年)の編者の一人となった。

組合の障害児学校部長となった80年代からは、教職員定数法や寄宿舎職員の地位改善についての研究にも力を割いた。研究成果を学校現場に広げつつ、実質的な改善に結びつくよう運動を組織し、国会での議論につなげる努力をつづけた。

労働運動のと真ん中において、さまざまな困難に遭遇しながらも時代を切りひらいてきた三島さん。根底にはいつも、江東での障害の重い子どもにたいする自身の実践があったにちがいない。(なかむら たかこ)